

【学会レビュー】

日本社会学会第79回大会

(京都・立命館大学, 2006年10月)

高山 眞知子

金閣寺と竜安寺に挟まれた立命館大学衣笠キャンパスで、10月28・29日に今回の年次大会は開かれた。業界随一の全国規模の大会である。毎回シンポジウムのテーマは学会員の共通の関心事と想定されるものを反映しやすいが、今回は「人口減少社会のゆくえ」と「岐路に立つ社会学教育」であり（筆者は後者に出席）、また国際交流ラウンド・テーブルとして「アジア社会学のフロンティア」があった。一般報告の部会は領域ごとに二日間で計57、それぞれの部会で6個の発表があったから計342内外となる。大会のレジュメの冊子は約400頁と分厚い。まずは非常に活気のある学会だと言えよう。

長年の学会員である筆者は、今回は発表は行わなかったが、本学・江戸川大学で「社会学」を担当している関係上、研究者・教育者・同窓会員・リクルーター関心などを兼ねて出席した。

まず紹介したいのは、シンポジウム「岐路に立つ社会学教育」である。聴衆は大教室に超満員で、今日、研究者達が、大衆化する大学生を相手に社会学をいかに伝授するかに切実に苦勞していることの相互確認の場となり、しばし爆笑も湧き、とても興味深かった。

最初に奥村隆氏（立教大学）の「学生は社会学に何を見出しているか」という調査の報告があり、学生は、「役立つ」ということよりも、社会学の持つ幅広さ・自由さ・意外性・自己の分析・身近さなどに「面白さ」を見出していることが報告された。

次の野村一夫氏（國學院大学）の「社会学を伝

えるメディアの刷新——テキストとウェブ制作の現場から——」は、最近の大学生の現況から、「エリート・ソシオロジー」（研究に直結した社会学）ではなく「マス・ソシオロジー」（研究に直結しない社会学）の必要性や、そのための二次的パラダイムの必要性、そのためのディシプリンの内実、ネット上の社会学の現状、また、学際的問題領域研究（例えば、国際学・環境学・女性学・情報学など）の活性化に伴う一般教育科目としての「社会学」のディシプリンの明確化の必要性などが指摘された（ちなみに、本学では氏の著書『社会学感覚』はカリキュラムに使用している）。

続いて佐藤郁哉氏（一橋大学）の「社会調査教育の課題と方向性」では、諸条件を満たす適切なテキスト・ブック（1.日本語で書かれ、2.日本についての現実感があり、3.面白い）の欠如が指摘された。

最後の片桐新自氏（関西大学）の「社会学教育の意義——大学での社会学の学び方・活かし方——」では、社会学に対する入学時の第一印象から卒業論文の作成まで、社会学をいかにお膳立てしていくかについて、具体的知恵がいろいろと述べられた（少人数での演習、フィールドワーク・計量的調査実習・ゼミなどそれぞれの重要性など）。また、社会学的見方、ディシプリンの確立、その中でマクロ的視野や機能分析の不可欠性なども指摘された。

フロアから、学生に調査対象者への依頼文の書き方や挨拶の仕方まで教える苦勞が述べられ、大いに同情と共感を呼んでいた。

このシンポジウム以外で筆者の出席した部会には、東北地方の19～20世紀の人口構造を多面的に分析したもの、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』を中心にナショナリズムを分析したものなども含まれる。出席できなかったが気になった発表の中には、インド人女性アムリタ・パンデ氏（マサチューセッツ大学）の「Transnational Surrogate Mothering in India: Altruist Wombs and Global Sisters」（インドの対外的代理母業：愛他的子宮達とグローバルな姉妹関係〈筆者意識〉）や、望戸愛果氏（一橋大学）の

「軍隊の人的資源政策」、村瀬洋一氏（立教大学）の「日米における社会学の弱点と今後の展開」なども含まれる。

なお、この10月は折から世間では北朝鮮の貿易船の若狭湾舞鶴港等への入港問題が取沙汰されていたが、学会の帰途に筆者は初めて若狭湾の「天橋立」に立ち寄ってみた。学会では発表テーマも発表者もアジア関係がととも増えていたが、日本海に開いて発展してきた京都府の時の流れに、想いを深くした。